

デザイン専攻 アートプロデュース研究領域

オオイケ レナ

# 大池 伶奈



撮影:木奥恵三

## 美しさを信仰する / KEEP POLISHING

ミクストメディア、石粉粘土、ジェルメディウム/  
インスタレーション、ステンレス作業台、研磨剤

## 美しさを信仰する / KEEP POLISHING

本研究は、現代社会における身体改造がもたらす苦痛と快樂に着目し、自身と他者の身体経験を起点として、身体を変化させる過程に伴う感覚や心理を作品によって可視化することを目指した。昨今では SNS や広告を通じて美容医療が身近になり、理想の身体が数値や指標として提示される現代は、その基準に伴った身体改造を選択せざるを得ない状況にある。私自身もその一員である自覚を持っている。そして、自身の経験から身体改造における快樂と苦痛は対立するものではなく、同時に存在し、互いに影響し合っているのではないかと考え、その感覚を作品で表現した。

作品《美しさを信仰する》では、「美容」が一種の信仰の対象として機能している現代の状況に着目し、祈る姿勢をとった等身大の人物像を制作した。「美しくなりたい」という欲望のために、自身の痛みを正当なものとして受け入れている身体を重ね合わせている。人体の表面には、シリンジで絞り出したジェルによる線状の造形を施した。これは、美容医療のマイクロカニューレを用いた施術を彷彿とさせる。その下層には内出血を想起させる色彩を仕込むことで、美しく整えられた外身に潜む痛みや暴力性を表現した。理想を信じる過程で痛みが快樂へと変換されていく身体感覚を表現することで、現代社会における美容への信仰的態度に問いを投げかけた。

また、作品《KEEP POLISHING》では、手術台に見立てたステンレス作業台を研磨することで鏡面化した作品を制作した。研磨する行為は「自分磨き」という言葉に通じており、美しさが努力や自己管理によって維持される現代の身体と重なる。一方で、煤けた鏡面は磨くことでのみ身体を映し出す。鏡は周りを映し出し、自身がどのように見られているかという他者の視線を認識させる装置として機能している。この作品を見た観客は、鏡を通して自身の姿をも見ることになるだろう。

2つの作品を通して、美しさを求め続けてしまう現代の身体が、社会の価値観や理想像の中で、痛みと切り離せないまま存在していることを示した。